

前回分訂正	Grinze=Kater (誤) → Grinse=Kater (正)	【位置】末尾より上に5行目
-------	-------------------------------------	---------------

13. Die Cheshire=Katze は grinsen するか

前は上記訂正にあるように z と s さえ間違えてしまい、ますます grinsen されてしまっているような状況であるが、気を取り直して話を進めたい。

さて、前回の個所までも十分に混乱させられていたにもかかわらず、さらに変身(?)は進行し、アリスが一度ゲームに戻り、再びやってくる場面、すなわち原文では、

When she got back to the Cheshire Cat, she was suprised ...

とある部分がドイツ語訳では、

Als sie zum Cheshire=Kater zurück kam, war sie sehr erstaunt, ...

となっており、ここでは Grinse が Cheshire に変更されているのである。

以上をまとめると、ドイツ語訳名は Grinse=Katze → Grinse=Kater → Cheshire=Kater と変化(進化?)していることになる。作中ではこの Cheshire=Kater を最後に彼(?)は消え去ってしまうのであるが、しかし Katze と Kater とが交換可能の関係にあるのであれば、当然ここでは Kater から Katze への移行が期待されているものと考えられる。というように読者が考えるであろうと計算した上で原作者は、ある特定の名を「語らないこと」によって語ろうとしたのかもしれない。そしてその語られることになかった名こそが彼女(?)の本来の名であったのかもしれない。その名は、もちろん Cheshire=Katze である。ここで原作者は翻訳者と協力し、英語とは異質の言語遊戯的可能性を有するところのドイツ語を遊んでいるのである。

14. 『子供の夢』の綾子さんの午後三時の冒険

というところで再び『子供の夢』に戻りたい。綾子さんは「金目の黒猫」と別れ、今度は帽子屋と「野兎」と「栗鼠」の永遠の午後三時に遭遇することになる。彼らはコーヒーを飲んでおり、そのテーブルには「珈琲茶碗」や「珈琲注」や「ミルク注」や「砂糖壺」がある。その席で綾子さんは帽子屋から「『何故気狂は机が好きなのでせうか』」と質問されるが、答えることができない。それから日付を尋ねられた綾子さんは「『今日は一日だわ』」と答えている。(もしかすると誰か実在の綾子さんの誕生日が1日だったのかもしれない?)

帽子屋は「時間の魔術」なるものを女王に取り上げられてしまったらしい。その原因となったのが、次のような歌詞の歌だったらしい。

或る晩、多勢の盗人が、| 忍び込みたる物音に、| 夜番の犬が眼をさまし、| ワン——
ワン——、吠え立てる。

賊はア用意の握飯、| コレ——黒よ、良い犬よ、| そなたに之を遺るほどに、| そんな
に吠えずに、喰べなさい。

その後、「栗鼠」が「『むかし、むかし。或る処に三人の女の子の姉妹がありました。一番上の姉が恵美子さん。次の妹が眉子さん。一番下が節子さん。三人とも井戸の底に住んで居ました。』」という物語を始める。彼女たちは「砂糖水の井戸」で「マミムメモの物ばかり汲みました。松の木だの、三日月だの、麦粉菓子だの、目高だの、股引だの、色々マミムメモの物ばかり」ということである。

15. 『子供の夢』の庭球

とりとめのない話に愛想をつかした綾子さんはその場を退席し、とある庭へとやってくる。その庭で綾子さんは「骨牌」の園丁や廷臣に会う。彼らの中にまじってあの白兎もいる。みんなで庭球をするらしいが、女王に招待されていたはずの公爵夫人の姿がみえない。白兎によれば、ある理由から女王の不興を買ったためらしい。

白兎の語るその理由、つまり原文では、

"She boxed the Queen's ears --"

とある部分は、

『夫人が女王の耳を箱の中へ蔵つて了ひましてね。…』

と表現されている。ここでは特に「箱」が効果的に用いられており、日本語としても非常にすばらしい文章となっている。これがもし「耳を殴る」などというような表現では単純すぎて、あたかも日本語の「耳を澄ます」を *clean one's ears* とするような、結局は意味不明の単なる直訳になってしまったかもしれない。（…どうも論旨が…?）

さて、ここでの庭球はボールがはりねずみ、ラケットは「生きてある鶴」であり、なかなかうまくいかない。そのうちにまた黒猫が出現し、綾子さんに以下のように話しかける。

『それから、貴嬢、如何なすつて』

黒猫は以前に変らない優しい女の子の言葉を遣ひます。

ここでも黒猫は彼女らしい(?)ことが判る。(しかしもちろん、「女の子の言葉」を使うからといってそのことだけから彼女(?)が女の子である、と断定することはできないことも事実であるけれども…)

その後、物語は最後の局面、裁判の場に移ることとなる。

16. 『子供の夢』の裁判

最初に起訴状として朗読されるのが、以下の文章である。

ハートの女王陛下が、此の夏中、御料理遊ばしたる、甘味しいお菓子。其のお菓子をば、密と奪つて一ツ喰べたのは、ハートのジャックに違ない。今日は王様が其の御裁判を遊ばす也。ということであるが、ここでわざわざお菓子を「一ツ喰べた」としているあたり、なかなか奥床しい配慮が感じられるように思う。

証人の帽子屋の一言から3種類の日付が問題となり、

... the jury eagerly wrote down all three dates on their slates, and then added them up, and reduced the answer to shillings and pence.

という場面に対応する部分で、『子供の夢』では以下のようにその計算結果も掲載している。

一、拾四日

一、拾五日

一、拾六日

合 計 金四百五拾円也

この「合計」金額から推測すると「1日分」＝「10円」らしい(?)が、しかしこれが何の金額に相当するものであるかは不明である。

その後、アリスの証人の場面で王様が読み上げる *Rule Forty-two* は「『第四十二条。一里以上ノ身長ヲ持ツテ居ル者ハ此国ノ人民トナルコトヲ得ズ』」と表現されている。

やっと夢からさめた綾子さんは、今見た夢を姉に物語る。綾子さんが家へ帰った後にひとり残った姉が妹の夢を夢見る場面で、『子供の夢』の物語は終わりを告げる。